

平家物語考證

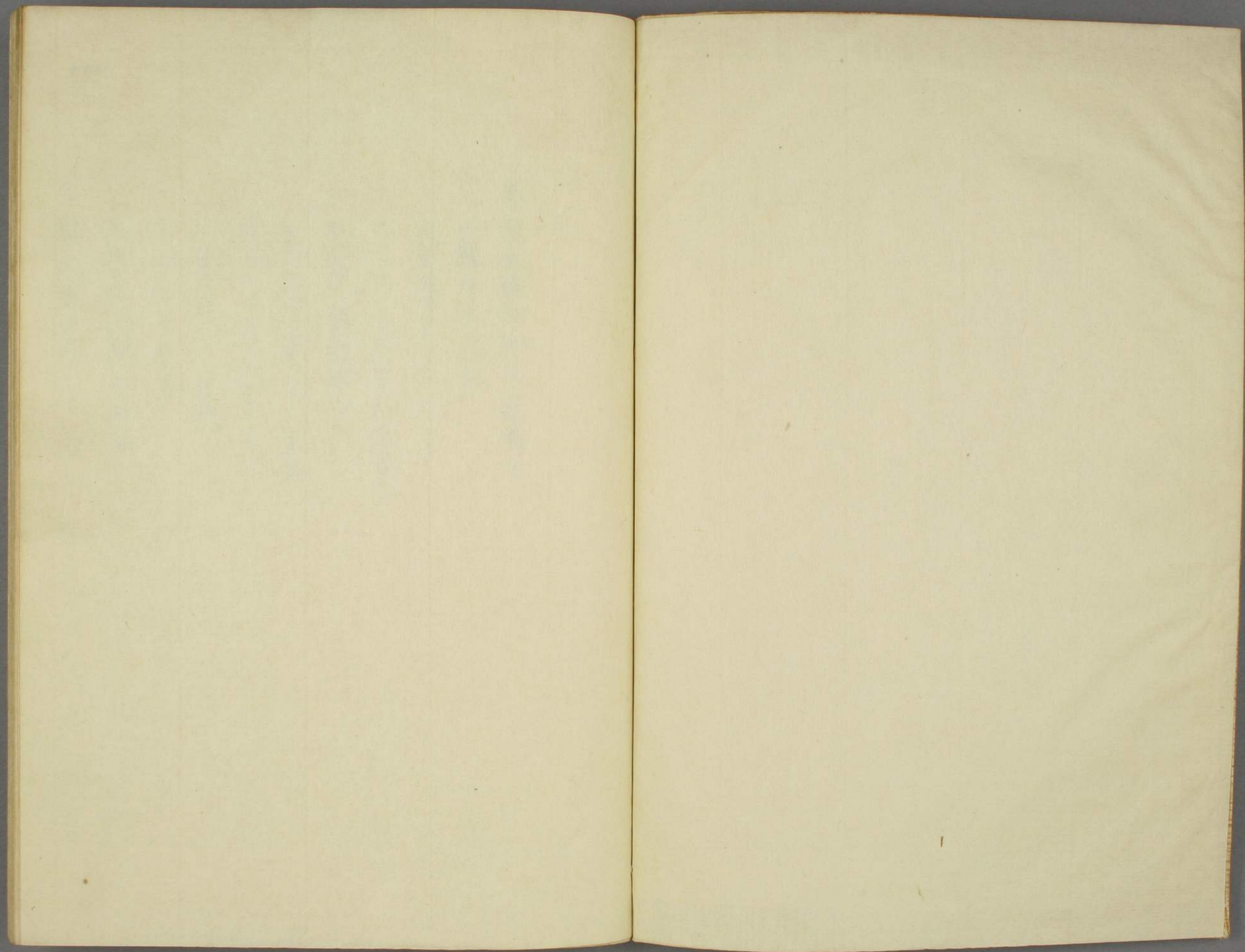
七

リ 5

814

7





門 5
號 814
卷 7



平家物語考説目錄卷七

- 第一 小國下向此事
- 第二 休生嶋まつての事
- 第三 火うちくりきん此事
- 第四 本曾此類書の事
- 第五 ちりかゝたの事
- 第六 藤系くりきんの事
- 第七 実盛さいこの事
- 第八 八んちう此事
- 第九 本曾山門様状の事
- 第十 同返様の事

平土平家きん志よ此形也の事
 平土王上於おち乃事
 平土維盛のさやこおちの事
 平土聖王陳幸乃事
 平土忠度於おちの事
 平土經政の於おちの事
 平土吉吉山のさよこおち
 平土一門於おち乃事
 平土九福系おちの事

平家物語考證卷之七

松堂閑人四醉生 編
 洛陽後學源道格 集
 羽林中郎將藤原定俊 補

北國下向之事

本居れくもんや義仲云々

補東鑑治承四年條下云木曾冠者義仲避上野國
 赴信濃國是有自立志之上彼國多胡庄者為亡父
 遺跡之上雖令入部武衛權威已輝東國之間成歸
 往之思如此云々又元曆元年條下云志水冠者雖
 為武衛御掣亡父已蒙勅勘被戮之間為其子其意

趣尤依難度可被誅之由云々按ニ東鑑壽永二年
之記闕タリ考フヘカラス然レトモ前後ヲ以テ
見ルトキハ物語ト相應ス清水冠者義重系圖義
基ニ作ル

馬此系のひよ付く云々

補孫子ニ所謂ル必依水草ト云是ナリ又延喜馬
寮式云毎年四月十一日始飼青草云々然レハ明
年四月ノ比ヨリ出軍アルヘシトノ催ナリ

わあへ討ち伐さしむるは以上大將軍六人志
のりつき侍三百餘人於合其勢十万解騎四月十七日
此辰の一點は朝を立てわあへ討ち趣く是れ

壽永二年四月廿三日或秘記云征討將軍ホ或以前
或以後次第發向今日皆了云々

かゝるをめぐりて云々

補按ニ片道ヲ給ルトハ驛馬駄餉等ノ供給ヲ云
ナリ古ヘハ諸國ニ軍團アツテ兵食ノ備ヘ虧ル
コトナシ後世ハ軍團ノ制廢レテ兵食ノ設ケ豫
ジノ備ハラス故ニ路次諸國ノ租稅官物マテモ
掠奪シテ芻糧ニ供スルナリ百練抄ニ追討使ノ
條下近日京中狼籍多シト云モノ是ナリ

らんせんせいけの云々

補權門勢家ノ莊園ヨリ奉スル正稅調庸等ヲ云

志の加し崎三川尻云々

補志賀辛崎御津何等ミナ名所ナリ湖西ノ通路
ナリ古へ北陸ニ行ク者コノ道ヲ用フ

竹生嶋まゐて此事

竹生嶋

補拾芥抄云竹生嶋近江其巖石皆能水精本朝五
奇異ノ一トス又云示現上人建立千手等身等云
又縁起ニ景行天皇ノ時湖中自然湧出ノ地ト
云々

かの志ん皇りんふあまひハとうるんくハ女をつ
つゝ阿らひハ方士を不死の薬をもとめよけり

てあうらの我思されハいあや悔〜とつひてい
つゝよあれ中あて老天水をう〜と〜と〜とあるる
をえさりらん云々

補童男非女ヲ遣トハ秦皇ノ故事ナリ方士ヲ使
トハ漢武ノ故事ナリ

ある種の文よひよく云々

補何經ノ文ト云コト所考ナシ或ハ華嚴經ニ出
ツト云然トモ新舊譯トモニ此文見ヘス曾テ竹
生嶋ノ僧徒ニ問ヘ凡所出ノ經ヲ知ラス最勝王
經云大辨才天女依島山頂葺葺為室結草為衣坐
翹一足又云或在山巖深險處或居坎窟及河邊云

々按ルニ續谷響集云辨才天經凡有五本本邦中
古社撰者所造云々然レハ辨才天經ニ偽造ノ者
多シ證スルニ足ラス最勝王經金光明經ヲ以テ
證トスヘシ

それ大唐んくく天ハ日うこ此如來法身の大士也
妙音無也云々

補續谷響集ニ大日經ヲ引テ云美音天亦名妙音
天即辨才天異名云々

あつせまのりてて云々

補施ニ二種アリ財ヲ人ニ與フルヲ財施ト云法
ヲ人ニ教フルヲ法施ト云大藏法教等ニ詳ナリ

お約の月

十七夜月也 補藻鹽草ニ十七夜ヲ立待ト云十八

夜ヲ居待ト云

上玄石上

補故事談云村上聖主明月之夜於清涼殿昼御座
玄上を水牛角の撥ヲ引流シて只一石由座を
り又如釈之者自空飛来シ孫座ニ居ルハ彼ハ
何者ナリと問之處申云大唐琵琶博士廉承武より
只今此をを羅通事ゆつり御琵琶の撥おと
此いりさよ所入之忍くハ昔貞敏ニ授貽曲
の侍をを授云々聖主有睿感之氣由琵琶を令差

並給よりくれハウきありしは是ハ廉承武之琵琶より貞敏より二給之内よりと中なり終夜浄談詔ありて上玄石上をハ奉授云々

白龍 かんしと

補宇賀神將白蛇示現經ト云アリ是ノ所縁ニ依テ白龍ノ所現ヲ云ナルヘシ幾ナラサルニ十万人甲兵ヲ覆没ス白龍ノ現スル何ノ瑞ソヤ
むうち合戦

越前の火うちり城を焼くまへる云々

壽永二年五月一日或秘記云傳少去月廿六日官軍攻入越前國云々

平泉寺長吏齊明いきし

補平泉寺ハ白山ニ属スル寺ニノ天台宗也本尊藥師佛秦澄ヲ開創トス齊明ガ系圖ニ白山平泉寺ノ長吏トアリ延喜玄蕃式云威儀師六人云々海人藻屑等ニ詳ナリ僧中ノ威儀ヲ掌ル者ナリ齊明ハ藤原氏魚名裔武者所實信子

とりし北入乃

補富樫藤原氏鎮守府將軍時長ノ別流

いありの新助

補新介實澄系圖上ニ同シ

無藤太

補系圖上ニ同シ越前権介為頼ノ後
林の六郎

補系圖上ニ同シ從五位下光家ノ子
かき南山をひくく云々

補白氏文集并ニ新撰朗詠ニ出タリ

むらつち

補天竺ニ無熱池アリ三界義等ニ出タリ

らんめい池

補昆明池ハ漢武ノ穿ツ所ナリ按ニ德政ノ舟ヲ
汎ルトハ関中記云堯時理水訖停舩此池云々是

ノ故事ヲ云々

平家屋クテ加賀のあへおらん云々

同十二日或秘記云傳聞去三日官軍攻入加賀國合
戦兩方多死場之者云々

木曾此らん志よ

白え

補系圖ヲ按ニ貞保親王白幡ヲ賜フ事アリ依テ

清和帝ノ後胤白幡ヲ以テ標トス

くりかた谷

補今俱梨伽羅峠ト云所ナリ不動ノ像ヲ安置セ

ル寺アリ

かき木

補歌林良材集云かこそ木と云ハ神の母々々の
はまに刀此様あくたそ木之又子木氏云也旧
事紀首書ニ豊受大神宮御飭秘記ヲ引テ云組目
利上謂千木組目稍下謂搏風
くろりる此矣

補鷲ノ黒ホロヲ云

るひく此ありとて

不知版之古制有銚立乎否矣凡器物左右建木謂之

銚立

補版ニ銚立將碁頭矢賦等ノ名目アリ軍器ノ圖

ニ詳ナリ

こ此免明とナハ

補東鑑云木曾左馬頭義仲朝臣右筆有大夫房覺
明者元是南都學侶也義仲朝臣誅罰之後歸本名
號信救得業云々

歸命頂礼

補南無ハ梵語ナリ中華ニ翻譯シテ歸命ト云故
ニ南無歸命ト云ハ重言ナリ五戒威儀經云歸命
頂礼七所八會盧舍耶佛歸命頂礼ノ出所可見

八幡大菩薩

補水鏡云延暦元年五月四日うさの宮院宣志後
やうわきせ量却乃ありよ三界ニ他生一々方便

をめぐりし衆生をみちひく名をハ大自在王菩薩と名むいふとのまひき

三身之全より

補續古事談云江帥申りハ大菩薩ハ釋迦の三尊なり又云阿弥陀の三尊と云

三所此れん扉

三所者社家説應神天皇神功皇后姫大神已上三社也未知是非猶可考

補中御前西御前東御前ヲ云三所ハ坐迹ナリ推ナリ三身ハ本地ナリ實ナリ故ニ推扉ト云ナルヘシ

箕裘

記學記

補良治之子必學為裘良弓之子必學為箕云々禮ノ學記ニ出タリ

和光

補老子經ニ出タリ

そり祖父前陸奥守云々

補義家 義親 義家第二子 為義 義親第四子 義賢 為義第二子

義仲 義賢第二子 系圖云七歳春於祖神社壇依加首

服号八幡太郎云々

あいに此のりをとりて云々

補前漢東方朔ノ傳ニ出タリ

螳螂ヲ斧を怒て立車又向ふ

莊子

上矢此ク好

補古射法書云鏑の目の事ハツ目云々ニツとも
くくを一ツあらんく持也云々今ニ至テ諸衛
ノ胡籙上差ノ鏑ヲ用フ

昔神功皇后云々

此事可考

補日本記ヲ按ニ神功皇后ノ新羅ヲ征セラル、
時靈鳥ノ瑞ナシ神武天皇擊長髓彦連戰不能取
勝時忽然天陰而雨水乃有金光靈鷲飛來止于皇

弓弭云々或クハ此ノ故事ヲ誤ルカ

賴義乃朝臣云々

補今昔物語ヲ按ニ賴義厨河ヲ攻ルトキ遙ニ王
城ヲ禮シテ自ラ火ヲ取テ誓テ此レ神火也ト云
テ此ヲ投ク其時ニ鳩出來テ陣ノ上ニ翔ル賴義
此ヲ見テ泣々此ヲ禮ス其時ニ忽ニ暴キ風起テ
城ノ内ノ屋共一時ニ焼ヌト云々

くりかおと此事

壽永二年五月十六日或秘記云官軍前鋒乘勝入越
中國木曾冠者義仲十郎藏人行家及他源氏亦迎戰
官軍敗績過半死了云々○同六月四日記云傳聞北

陸官軍悉以敗績今晚飛脚到來官兵之妻子等悲淚
無極云々此事去一日云々早速風聞雖有疑六波羅
之氣色事損云々○五日記云前飛驒守有安來語云
官軍敗亡之子細四万餘騎勢帶甲冑之武士僅四五
騎其外過半死傷其殘皆悉弃物具交山林大畧爭其
鋒甲兵等倚以被伐取了云々盛俊景家忠清三已上人
彼家第一之勇士也各小惟二前一ヲ結天本鳥ヲ引ク夕ニ天
逃去希有難存命不伴僕從一人云々凡事躰非直之
事誠蒙天之攻歎敵軍纔不及五千騎云々彼三人郎
小大將軍ハ相爭權盛之間有此敗云々今日自院有
召為被定北陸官軍敗績事也然而稱病不參雖非重

不及相人之出仕之故也

くらくら此取郎

補倉光ハ藤原氏魚名ノ裔ナリ

かくら

補裝束抄鏡地之和鞍ニ作ル

志此ハ合戦の事

かぐれ玉志れハ

補和歌ノ名所ナリ

さハいハこれ事

長井北砂後お苗

補長井ハ莊園ノ名齋藤ハ藤原氏越前權介為頼

ノ裔別當ハ莊園私官ノ名

あり此れ綿のひきしれ

補錦襖ヲ着シ金装ノ刀ヲ帶スルハ諸衛將督ノ

服ナリ實盛無位ニモ此ヲ用フ僭ナリ

ききう此矢

補古射法書云征矢ハ切符中黒いつきも海羽を

付へーと云

何れもれ巴ハ云

補らむてうもよト云ニ種々ノ説アリ或云軍上

手ヨ又云クムテウツヨト按ニ兩説トモニ穩ナ

ラサルカ日本一ノ剛ノ者ト組ハ上手ヨト云事

ナルベキカ上手下手ノ名ハ本ト相撲ヨリ出タ
ル名ナレハ組ト云縁ニテ上手ヨト云ナルヘシ

近年の儀は付しき云

補武藏國長井ノ莊ハ宗盛ノ莊園ナルヘシ實盛

ヲノ私莊ノ別當タラシムルナリ

錦此ひきしれをぬめんゆへり

補宗盛ノ實盛ニ緋錦襖ヲ賜フコト故黃門定基

卿ノ談ニ軍服ハ若クハ常式ヲ用サルカ無位ノ

實盛ヲノ緋錦襖ヲ許容セラルト云々今按ニ

錦ハ綾ニ同シ五位以上ハ綾ヲ用フ緋ハ禁色ナ

リ宗盛何ソ私ニ禁色ヲ許容セシヤ庶人ハ素襖

ヲ用フ布ヲ以テ制ス軍服トイヘトモ常式ナキ
ニアラス宗盛ノ許可セルモ過失少シキナラス
實盛死ヲ決シテ命ヲ授ク勇士ト稱スヘシ易簣
ノ志ニ乏キ惜カナ

昔此志ありはハ云々

補前漢書本傳ニ詳ナリ

なりれをつくして云々

補此ノ語呂氏春秋ニ出タリ

らんをく此事

かつされさ忠清ひたの守りき家云々

補盛衰記ニ忠清北國ニノ戦死スト云或秘記ニ

忠清景家等北國ノ敗ニ希有存命スト云東鑑ニ
忠清元暦二年斬ニ遭トアリ物語及ヒ盛衰記ト
モニ誤レリ

六月一日此日云々

補百練抄云六月十一日藏人右衛門権佐定長奉
勅召祭主親俊於殿上口仰云兵乱平者可行幸太
神宮之由可祈請申之由被仰下之此後召官寮令
ト申行幸太神宮之吉凶神宮行幸天平十二年十
一月天皇行幸伊勢大神宮被祈申太宰小貳廣繼
謀反事

後上乃下口

補殿上ノ下ノ戸ノ口ヲ云禁秘御抄等ニ詳ナリ
太神官ハ云々

補御鎮座傳記日本紀ニ出タリ

日本六十よあう云々

補延喜神名帳云天神地祇惣三千一百三十二座
大四百九十二座小二千六百四十座冥道トハ陰
陽家ノ祀ル所泰山府君妙見ノ類ヲ云

右を此少抄云々

補廣継カ事跡前ニ出タリ系圖云身有七能異常
人得龍駒京洛鎮西朝夕往反云々

天平十八年六月十八日云々

補系圖云天平十八年^{丙戌}太宰府觀世音寺供養之
日玄昉僧正為導師乘腰輿之時自大虛有聲采其
身忽然失亡云々後日其首落興福寺唐院云々按
ニ續日本紀ノ年月系圖ニ同シ死於徒所世相傳
云為藤原廣繼靈所害云々

唐人カクン云々云々

補韻書ヲ按ニ玄還音通セス昉ト七トモ音異ナ
リ世俗ノ謬傳ナルヘシ

帝位此為云々

補帝王系圖云二品有智子内親王齊院ノ始云々
朱雀院此由時云々

補是ノ所文義分明ナラス將門純友カ乱ハ朱雀院ノ時ニ當レリ例ト云ヘカラス具上石清水臨時ノ祭ハ村上帝天曆五年ニ始レリ朱雀院ノ時ニアラス

きそ山とんとてう状

二のまひ

補安摩二ノ舞ハ散樂ナリ

山とんと返てう此事

全端せいま

補四輪王仁王般若經ニ出タリ

志くりん十せう

補止観十乘摩訶止観ニ詳ナリ

ゆり三ごう

補瑜伽論弥勒所造三密ハ身口意ノ三密ヲ云

平家山とんとへのとんと志よ此事

一門公口十人同のとんと志よ

補百練抄云七月八日平氏公卿十人前内大臣以下

連署起請送睿山准藤氏奥福寺以延暦寺為平氏

氏寺准春日社以日吉社為氏社之

為状

補四ハ四満田融ノ義頓ハ漸ニ對スルノ義台家

諸書考ヘシ

志やる

補遮那名義集此云遍照

志の三位仍兼右中守

補公卿補任ヲ按ニ通盛養和元年越前守ヲ辞ス

散位從三位ト稱スヘシ

志の三位仍右中守

補從三位行右近衛中將ト稱スヘシ兼官補任ニ

所見ナシ

正三位仍右中守

補伊豫權守ナリ

志の三位

補但馬權守ナリ

清宗

補清宗受領ノ兼官ナシ右衛門督ヲ以テ侍從ヲ

兼又

經盛

補備中權守ヲ兼又

とも

補知盛從二位權中納言ナリ征夷使左兵衛督等

ノ兼官ナシ

故里

補受領ノ兼官ナシ

む祿なり

補散位從一位ト稱スヘシ凡ソ位貴ク官賤トキ
ハ行ノ字ヲ用フ官貴ク位賤トキハ字ノ字ヲ用
フ唐ノ制行守試ノ三等アリ本朝行守ノ二等ノ
ミ

主上北都落の事

此以下至卷末安德皇帝播遷之事實採或秘記所載
而録于此以備考證

壽永二年七月一日或秘記云賊徒今日可入洛之由
兼日風聞然而無其事傳聞貞能議申云不可遣追討
使只於勢多邊可相待云々○二日記云右大弁親宗

為院御使來雖物忌依為勅使呼入共依疾厚隔簾謁
之仰云賊徒可入洛之由風聞其事若實者可有行幸
院御所歟而内侍所御京外之条如何兼又仙洞定物
騷歟其故平家武士亦為守護定候御所邊歟而賊徒
打入共縱於君世害心与守護之武士為決雌雄致狼
藉者也已可為戰場此条如何两条可計奏者申云賊
徒入花洛之程事別段事也院内同居之条可被隨有
隨様也若有行幸先賢所各別之儀不可候京外之条
一切不可有憚是尋常之時之儀也仙洞狼籍事跡如
左右也兼日之案不可叶此条已大事也短慮難及歟
者親宗云左大臣同有此問不及他人彼丞相申云内

侍所差副所司可令御座温明殿欵賊不可奉取内侍
所之故也云々此申狀聊有所存欵然而余不甘心有
行幸者劔璽可被奉具賢所許雖奉離君可也詮之故
也○同日記云傳聞賴朝忽不可出只木曾冠者十郎
十分手於四方可寄之由議定云々○三日記云或云
秋節以前賊徒可入京或云待関東之勢九十月之頃
可入洛云々閭巷縱橫之說彼是難知今日依浮說武
士騷動○廿一日記云午刻追討使發向三位中将資
盛為大將軍肥後守貞能相具向多原方經予家东小
路畠小家僕小蜜々見物其勢千八十騎云々慥計而
見在之勢僅千騎有名世實之風聞人々不察欵今夜

法皇臨幸法住寺及事火急之時可有行幸之故云々
○廿二日記云卯刻人告江州武士亦已入六波羅邊
物騷々極々又聞入京非實說自地武士亦登台嶽
集會講堂前云々日來登上之僧綱亦併下京但座主
一人不下京云々世動寺法印同以下京又聞十郎藏
人行家入大和国住宇多郡吉野亦与力云々仍資
盛貞能亦不趣江州相待行家已入洛云々貞能去夜
宿宇治今猶欲向多原地之間有此事仍止彼前途相
待此入洛云々又聞多田藏人大夫行綱日來属平家
近日有同意源氏之風聞而自今朝忽謀反橫行摂津
河内兩國張行種々惡行河尻船亦併點取云々兩國

民皆悉与力云々又聞丹後追討使忠度其勢非敵對之間飯大江山了云々凡一今之事非直事欵今日上皇宮心相參集有議定之事云々予同雖有其召依疾不參今日可有行幸同宮之由雖有其儀依為復日延引明後日可臨幸云々○廿三日記云六波羅之邊歛息之外兼他事云々今且法皇渡御法住寺御所云々依世間物念也○廿四日記云此一亥日江州武士登台嶽今夜可有夜打之由風聞仍忽行幸法住寺涉所及晚天云々依此邊有怨余女房相共渡法性寺家○廿五日記云寅刻人告云法皇御逐電云々此事日來万人不度幾也於今之次第者頗可謂世支度欵

子細追可尋聞卯刻重少一定之由仍女房亦少々也山奥小堂之邊余法印相共他僧兼向堂最勝金剛院候佛前此間定能以來尋出幽閑之所密々隱置了及已刻武士亦奉具主上向院地方了在籠鎮西云々前内大臣已下一人不殘六波羅西八條小舎不殘一所併灰燼了一時之間煙炎滿天昨者称官軍欲追討源氏亦今者亦君指邊出逃去盛衰之理滿眼滿耳悲哉生死有漏之果報誰人免此難恐而可恐慎而可慎者也撰政自然遁其難逃去雲林院信範入道堂邊方了云々或人告云法皇御登山了人々來泰候之有秘藏云々平氏皆落了之後定能以參山了付件以申參入如何

之由了申刻落武者亦又歸京敢不信用之處事已一定也貞能稱一矢可射之由云々或又奉具主上及劔重賢所亦欲趣鎮西而可也長下仍為取具可然之公也云々怖畏雖無限忽不及計畧作天任運奉念三室之處飯京之武士亦以此最勝金剛院可構城郭之由下人來告仍遣人令見之處已少々來趣云々非可同居非可退却仍周章相伴女房少々其殘隱山向日吉辺之處源氏已在木幡山仍忽宿稻荷下社迎狼籍不可勝計然而參社頭奉法施了自然之參詣可謂結緣歟此辺猶有怖畏云々仍昨晚欲向日野今躬此事以前法印被飯白川房了今之間送使者云可來我房

今夜相具欲登山者依有路次之恐不行向寄宿家之為躰凡早之雖未曾有身無一過今遇如此之難宿業可悲同廿六日以下之記錄第八卷

木曾在云々必より云々

補百練抄云七月廿二日源氏軍兵已着東松本相

卒大衆登山云々

方々へうつてをさむけらり

補百練抄云廿一日新三位中將資盛卿已下為追

討使向宇治其勢三千餘騎

ていと名利此地云々

補白氏文集曰帝都名利場鷄鳴無安居

去程に法皇をハシ

補百練抄云廿四日天皇俄行幸法住寺殿^上御内侍所同渡御夜半上皇密ニ出御法住寺殿臨幸叡山院中男女不知之失度

内侍不

補禁秘御抄云白河院仰曰内侍所神鏡飛出欲上天而女官懸唐衣袖未引留依此因縁女官奉守護云々

あんやく

補印ハ令ニ所謂天子内印方三寸ト云是ナリ天皇玉璽ノ文アリ鑰ハ禁秘御抄云節刀鑰天曆帝

付寶劔帶取不離御身云々

と紀のみ

補三代實録等ニ内豎奏時簡ト云是ナリ

をん上

補玄上ハ琵琶ノ名鈴鹿ハ和琴ノ名ナリ禁秘御抄ニ詳ナリ

ひのゆさ

補禁秘御抄云御劔在御座南端ト云是ナリ

を系司ゆつあのみけ

補藻塩草ニ依ルトキハ近衛司ハ左右ノ大將ニノ御綱佐ハ中将ナリ又近衛司ハ近衛ノ官人ニ

ノ御綱佐ハ大舎人ヲ云ナルヘシ是時左近衛ノ
大将ハ藤實定ナリ右近衛ノ大将ハ藤良通ナリ
二人トモニ京師ニ留ツテ車駕ニ供奉セス

如山北辺ちそくめん

補吉記云壽永二年七月廿五日丁亥主上御乗車
殿下同令扈從給而自途中西轅逐電物念之間武
士等不知此旨云々誠是氏明神眞助歟先令落着
信範入道知足院給次令向西林寺給

これより都おち此事

秋後五秋後六

補系圖ヲ按ルニ實盛ガ子盛房一人ノミ

せいしゆめんかう此事

魚いきい

補睥睨釋名曰城上垣謂之睥睨

いちろく此色よそく

補莊子ニ出タリ

曹山の庄自志きよし

補篠原合戦ノ條下ニ是三人大番役ニテ折節在
京シタリケルヲ大臣殿汝等ハフルイ者ナリ軍
ノ様ヲモヲキテヨトテ今度北國へ被向タリト
云々治承ヨリ壽永マテ召籠ラル、ト云コト物
語ノ自語相違ナリ

きりりの都あり事

五条北三位俊成乃以此事云々

補異本ノ物語五條京極ト云々俊成ハ正三位ナ
リ安元二年九月依病出家法名釋阿云々

せん 志う此所云々

補拾芥抄云壽永二年二月日被下院宣三位中将
資盛卿奉近古以來和歌可撰進云々

禮の引ありせり云々

補歌卷ヲ懷中スルヲ云引合ハ軍服ノ圖ニ出夕
リ

せん と 禮を云々

補後江相公夏夜於鴻臚館餞北客詩序ノ文ナリ

子さい 志うを云々

補拾芥抄云千載集文治三年九月廿日依後白河
院々宣入道俊成卿奏之云々

禮まき此所あり事

仁和寺此所家の内所云々

補色葉字類抄云真然仁和年中建立依之号仁和
寺元亨釋書云寛平上皇禪居側室俗曰御室

青山 持せて云々

補今伶官太奏宿禰廣經ガ家ニ青山ノ摸セル琵琶
アリ面影ト云

を在い乃とうきやう云々

補童形ニ持幡童中童子大童子等ノ品ナリ蹇驢
嘶餘云出世院号堂上ノ息或ハ養子清僧ナリ坊
官妻帶坊号出世同輩ナリ侍法師妻帶坊号皆貴
所門跡ニ給仕スルノ者ナリ

大納言此法印云々

補系圖ヲ按ニ葉室光頼ノ子ニ行慶ト云僧見ヘ
ス或光頼卿ノ養子ト云々

青山此さゝの事

うさのちよく

補朝野群載字佐宣命云先々御代々乃例仁三年

仁一度比神寶造錫天奉出給补云々

むり仁明天皇此云々

補大系圖云貞敏藤原氏兵部卿磨曾孫刑部卿繼
彦第四子掃部頭本朝琵琶濫觴之師也承和年中
遣唐使在唐十五年對于大唐廉承武令傳琵琶曲
弘通當朝畢多渡秘曲我朝琵琶祖也禁秘御抄玄
上条下云掃部頭貞敏渡唐之時所渡琵琶二面其
一欵云々按ニ玄上牧馬ヲ一雙ノ名物トス貞敏
所渡ノ二面カ物語ニ三面ト云ハ玄上牧馬ニ青
山ヲ加ヘテ三面トスルモノカ盛衰記ニ二面ト
云トキハ玄上青山ヲ指ト見ヘタリ

一 志んのかおち此事

池の大納言形盛此口云云

補百練抄云頼盛卿一類留京都云々

せきとの院

補按ニ古へ山崎ノ南ニ関アリ是ニ就テ官舎ヲ

建ツ關戸院ト云フ今ハ絶タリ土人関戸町ト云

是邊ナルヘシ

玉比古

補葱花輦ヲ云装束抄云葱花ヲ金ニテ打テ御輿

ノ上ニ居ルナリ

まと後あひせよ云々

補東鑑元暦二年七月条下云前筑後守貞能者平

家一族故入道大相国專一腹心者也而西海合戰

不敗以前逐電不知行方之處去比忽然而來于宇

都宮左衛門尉朝綱之許云々朝綱強申請云属平

家在京之時聞舉義兵給事欲参向之刻前内府不

免之爰貞能申宥朝綱并重能有重等之間各全身

参御方攻怨敵畢云々仍今日有宥御沙汰所被召

預朝綱也

あくつおち此事

志んらむくさいかうらいの志ん

補新羅百濟高麗ハ東夷ノ諸國ナリ東國通鑑ニ

詳ナリ契丹ハ北狄ノ名隋書唐書等ニ詳ナリ
を
此
く
る
玉
の
い
き
る

補鴛鴦瓦長恨歌ニ出タリ玉甃華清宮アリ楊妃
外傳ニ出タリ

